九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

鍾嶸の文学理念

林田, 慎之助
九州大学文学部 : 助教授

https://doi.org/10.15017/9782

出版情報：中国文学論集. 7, pp.1-16, 1978-06-20. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

鍾嶸の文学理念

林田慎之助

一

中国文学史の上で本格的な批評文学が出現するのは六朝でも斉梁の時代である。劉勰の『文心雕龍』と鍾嶸の『詩品』の出現がそれである。ところでこの二つの批評文学の専著は、その批評の体裁と内容、様式と性格とにおいて著しく対蹠的である。劉勰は文学原理の考察、文体論の始源と特徴、文章の修辞美学の追求等の問題をつねに文学史の作家と作品に照しながら、そこに周到な配慮と精緻な検証をおこない、完結した一つの批評文学の小宇宙を構想している。いっぽう鍾嶸は数多くの詩体のなかで五言詩をとりあげ、その五言詩にすぐるる詩人を上品、中品、下品の三等に品等わけをする批評に主眼をおき、併せてその源流を考察しようとしたもので、やや印象主義的な批評方法によりながら鋭い審美眼を発揮して独自である。

鍾嶸は『詩品』序のなかで、先行する歴代の文学批評に論評を加えながら、自からが依拠する批評の原理と方向性をあきらかにしている。

陸機の文賦は通なれど貶なく、李充の翰林は疏にして切ならず。王徽の鴻寶は密なれど裁無く、顔延の論文は精なれど暁り難し。摯虞の文志は詳にして博贍、頗る知言と曰う。斯の数家を観るに、皆就文体のみを談ずるも、優劣を顕さず。謝客の集詩は詩に逢えば輒ち取り、張騭の文士は文に逢えば即ち書するに至っては、諸英の志録、並びに義は文に在るも、嘗って品第無し。嶸の今録する所は五言に止まる。然りと雖も今古を網羅し、詞文殆ど集まる。輕か清濁を弁章し、利病を掎摘せんと欲するは、凡て百二十人なり。此の宗流に預る者は便ち才子と稱す。斯の三品の升降に至っては差かも定制に非ず。方に變裁を申ぶるは、請う知者に寄せん。

摯虞の『文章流別志』は別としても、陸機の『文賦』、李充の『翰林論』、王徽の『鴻宝』、顔延之の『庭誥』はいずれも文学批評の書として、各々特徴を具えてはいるが、おおむね文体だけを論じて、明確なかたちで作家及び作品の優劣を論じていない。謝霊運の『詩集』、張騭の『文士伝』になると、文学の記録ではあったが、その品第は全くなされていない。そこにおしなべて鍾嶸の不満が存在した。そのため彼は五言詩を対象として古今にわたっての総集を編

んだだけではなく、百二十人の詩人を抽出して、その清濁優劣を分明にし、その長所欠点を指摘する作業に取り組んだのである。ここに鍾嶸が『詩品』の制作にとりかかる第一の動機があったといえる。

当時、すでに文学批評を除く分野にあっては、斉の謝赫の『古画品録』が画論として、梁の庾肩吾の『書品』が書論として、同じく梁の柳惲の『棋品』が棋論として、各々の技芸家の優劣を論じ品評をくだす風潮があった。とりわけ書画に関しては、宮廷の所蔵品とするために購入する際の価値の品第は現実的要請としてその基準を必要としたにちがいない。鍾嶸がこのような風潮に敏感でないはずはなかった。然も彼の身辺に詩の品評を実際にやっている先達がいた。それは斉の劉絵である。劉絵は竟陵王の文学サロンで詩人としても頭角を現していた具眼の士で、その時代の詩の批評に基準がなくみだれていたので、口頭で評価をこころみ詩品を制作しようと意図していたが、文章として完成しないままなくなってしまった。鍾嶸はこの劉絵の口頭詩品に感じるところがあって『詩品』の制作にとりかかったのである。

王公搢紳の士を観るに、博論の餘ごとに、何ぞ嘗って詩を以て口実と為さざらんや。其の嗜欲に随いて商搉同じからず。淄澠並びに泛れ、朱紫相奪う。喧議競い起りて、準的依る無し。近ごろ彭城の劉士章は俊賞の士なり。其の淆乱を疾みて、当世の詩品を為らんと欲し、口陳標榜するも、其の文未だ遂げず。感じて作る。昔九品は人を論じ、七略は人を裁す。較ぶるに資実を以てすれば、誠に未だ値らざること多し。詩の技為るに至りては較爾として知るべし。類を以て之を推せば、殆ど博奕に均し。

文学の翫賞にあたってなんの基準もなく勝手気ままに議論する当世の王公搢紳を嘲笑し、人物評価のむつかしさにくらべると、詩の技術は博奕の技術とおなじほどに見分けやすいという鍾嶸の発言は実に大胆率直である。自からに具眼の士としての確信と見識なくんばなせぬ発言である。

鍾嶸が四言詩ではなく五言詩を品評の対象にしたということはすでに一つの見識であった。同時代の劉勰が『文心雕龍』明詩篇で四言詩を正体とみたて、五言詩を流調とみなして、所謂古典的詩体観を一歩も出ていないことを考えても、そのことは瞭然とするであろう。五言詩について語る鍾嶸は「流調」ということばこそつかわないが、「五言は文辞の要に居る。是れ衆作の滋味有る者なり。故に流俗に会うと云うは、豈に指事造形・窮情写物の最も詳切を為す者なるを以てならずや」（詩品序）と論じて、五言詩が流俗に会すると云われてきたというのは、あきらかに劉勰の詩体観を意識したふしがある。然も五言詩が流俗の好みにあうのはそれだけの理由があるとみて積極的に五言詩のもつ詩体的価値を認識している。

『詩品』の品評論はすでにこの詩体の選択評価にはじまっている。摯虞、李充のようにおしなべて文体別にその様式を論ずることに、鍾嶸の関心はない。まして謝霊運の『詩集』、張隲の『文士伝』のように「詩に逢えば輒ち取り、文に逢えば即ち書す」といった無原則的な詩文とのかかわりかたを彼は否認する。鍾嶸は自己の見識において五言詩を撰択し、自己の美意識によって五言詩の作者の優劣を品評する。そこに中国詩史のなかで対象を撰択し、撰択した対象にかかわってゆく鍾嶸の内的必然性があり、詩論家としての文学的責任が存在している。拙論はこの内的必然性と文学的責任の所在に留意しながら、私見による論説をたててゆくことにする。

二

鍾嶸の『詩品』が制作されたのは、梁の武帝の天監年間であるが、その完成期は恐らくは天監十二年から十七年にかけての五年間に相当するであろう。『詩品』がとりあげた詩人百二十人のいずれもが物故者である。その内、死没年代のわかっているもので、最も年代のさがる詩人は沈約である。その沈約がなくなったのは天監十二年であるし、鍾嶸はそれから五年おくれて天監十七年に此の世を去っている。『詩品』の完成年代はこれから推定されるが、鍾嶸が対面した詩人の多くは、斉朝、ないしは斉梁両朝にわたって活躍した人々である。斉の永明年間所謂「竟陵の八友」が華々しく詩壇に台頭した時期には、鍾嶸はすでに青年期を迎えていた。「竟陵の八友」に数えられる王融、謝朓、それに竟陵王の文学サロンに参加している劉絵といった詩人と彼が対面し語り合う機会をもっていたとみられる資料が『詩品』のなかにある。いかなる批評家の文学理念にしても、その批評家が対面した文学者とその文学者をとりまく文学的情況への関心と参加をぬきにして、その成熟の度合をみることはできない。とすれば、斉梁の文学的情況とのかかわりのなかで、鍾嶸は自己の文学的営為のあるべき姿をどうとらえ、どう考えていたのであろうか。

今の士俗に斯の風娯んなり。纔かに能く勝え、甫めて小学に就き、必ず甘心して馳騖す。是に於て庸音雑体、人各々に容を為す。膏腴の子弟をして文の逮ばざるを恥じ、終朝黙綴し分夜呻吟せしむるに至る。独り謂いて驚策と為すも、衆観すれば終に平鈍に淪む。

当時、士庶の階層の別なく、詩作に熱中する風潮があり、「小学」をはじめる八歳の頃から詩作に気をとられ奔走したというのは驚くべき現象である。さらに貴族の子弟に至っては詩作にひけをとることを恥じ、朝となく夜となく平鈍な句作りに呻吟する状態であったとする鍾嶸の批判は辛辣である。

かかる現象はなにも斉梁の時代に限るものではなかった。すでに宋の大明年間にはじまる現象であったことを知らせるものに、裴子野の所謂『雕蟲論』がある。

大明の代、実に斯の文を好む。高才逸韻頗る前哲に謝し、波流同じく尚び、滋として篤し。是れより閭閻の年少、貴族の総角は六芸を擯落して、情性を吟詠せざるは莫し。

『雕蟲論』は通説に従えば、従来梁の大通元年ごろの作とみなされてきた。そうであるとすれば、天監期に制作された『詩品』のほうが先行していたことになる。これは間違っている。拙論の「裴子野の〈雕蟲論〉考証」では、『雕蟲論』なる一篇はもともと裴子野が書き上げた宋代の断代史『宋略』に属した文章論であり、斉末の作であると考証した①。こうなると通説とは逆に『雕蟲論』が『詩品』に先行した文学論であったということになる。私見によれば、『雕蟲論』という独立した一篇の文章論のかたちで、『宋略』からぬき出したのは、宋の『文苑英華』である。そうすればこの歴史家の未だ文章論として独立していなかった宋代文学批判論を、鍾嶸がどれほど意識していたかどうか、たしかに疑念の残る余地はある。然しながら対象とする時代こそ異なるけれども、批判の精神と論理において両者に共通するものがあるところからみて、鍾嶸は裴子野の論説を踏まえ、自説の確信を深めることによって斉梁時代の詩作

現象に痛烈な批判を加えたものとみたい。

次に軽薄の徒有り。曹劉を笑いて古拙と為し、鮑照は羲皇上人、謝朓は今古独歩と謂う。而も鮑照を師として、終に「日中市朝満つ」に及ばず。謝朓を学びて「黄鳥青枝を度る」を得るのみ。徒らに自から高明を棄て、文流に渉る無し。

魏の建安期の詩人のなかでも、曹植、劉楨は『詩品』がもっとも尊重する詩人である。それを古拙と笑い、近き時代の鮑照を羲皇上人とあがめ、斉の謝朓を古今独歩と賞賛して師学する当今の詩人の軽薄振りを鍾嶸はなじっている。

近い時代の詩風に附和追随し、逆に遠き時代のそれを疎んじる風潮は、劉勰にも目に余る現象として映ったとみえ、「今の才穎の士は刻意文を学ぶも、多くは漢篇を略し、宋集に師範す。古今備に閲すると雖も、然るに近きに附して遠きを疎んず」（『文心雕龍』通変篇）と批判しているのが、それである。これを鍾嶸の批判と比較すると、批判の方向性は同じであっても、劉勰が一般論のかたちで穏やかな批判的態度に終始しているのに対して、鍾嶸の切込みの論理は鋭く皮肉にみちている。

「鍾氏詩品疏」は謝朓を古今独歩と賞したのは沈約であるとして『梁書』謝朓伝の「沈約云う。二百年来、此の詩なし」という記事を引いている。さらに謝朓の詩を学んで「黄鳥度青枝」の句を作ったのは虞炎の「玉階怨」で、虞炎も又斉の永明期に、沈約・謝朓の仲間に属した詩人であるとしている。この指摘は鍾嶸の批判の論理が、劉勰の客観的観照をこえて、より直截に否定すべき軽薄な詩人の実相に迫っていたことを実証するものである。

後に永明体と称せられるようになる沈約・謝朓等の詩風について、『南史』陸厥伝は次のように述べている。

永明の末盛んに文を為る。呉興の沈約、陳郡の謝朓、瑯琊の王融は気類を以て相推す。汝南の周顒は善く声韻を識り、文を為るに宮商を用う。平上去入を以て四声と為し、此を以て韻を制し、平頭、上尾、蜂腰有り。五字の中、音韻悉く異なり、両句の内、角徴同じからず、増減すべからず。呼んで永明体と称す。

平頭、上尾、蜂腰、鶴膝は五言詩のなかにおいて平上去入の四声調を活用するさいの禁忌事項であり、他に脚韻、雙声に関する禁忌事項として大韻、小韻、及び旁紐、正紐があり、これを総称して八病説という。この八病説を唱えたのは沈約であるが、その文学的僚友謝朓、王融といった詩人達が本来中国語にあった声調を自覚的に取りあげ、詩律にそれを活用して、流麗なリズム感の表出をはかったのが永明体である。

斉の永明体が唐に出現する近体詩の詩律を導いた功績は大きいが、ひたすら様式美にむけられる関心が却って永明体の詩風から「真美」を喪失させる結果となったことも事実である。鍾嶸の永明体に対する詩風批判の目はもっぱらこの一点にそそがれていた。

嘗試みに之を言わん。古の歌頌を曰えば、皆之を金竹に被らしむ。故に五音を調うるに非ずんば、以て諧會する無し。「置酒高臺上」「明月照高樓」の若きは、韻の首なり。故に三祖の詞は文の或は巧みならざるも、而も韻は歌唱に入る。此れ音韻を重んずるの義なり。世の宮商を言うと異なる。今既に管絃を被らしめず、亦何ぞ声律を取らん。斉に王元長なる者有り。嘗て余に謂いて云う。宮商は二儀と倶に生ずるも、古より詞人は之

を知らず。惟だ顔憲之乃ち律呂音調を云うも、其の実大いに謬れり。唯だ范曄、謝荘は頗る之を識るのみ。嘗て知音論を進めんと欲せしも、未だ就らずと。王元長其の首を創め、沈約・謝朓其の波を揚ぐ。三賢或は貴公の子孫、幼にして文辯有り。士流景慕し、務めて精密を為す。襞積細微・専ら相凌架す。故に文をして拘忌多く、其の真美を傷わしむ。（詩品序）

これからみるかぎり、鍾嶸は詩に声調の諧和を具えることを否定してはいない。詩はもともと楽器の伴奏をともなっていたので、古人は当然音韻諧和を重んじていたという。これと、永明体の詩人が四声八病を説いてから、それを裏うものが詩律の精密につとめ、その細緻な技巧をしのぎあう状態とはわけがちがうと鍾嶸はみて、「真美を傷う」拘忌が多すぎる永明体の詩風を痛撃している。

「真美」とは何か。詩の音調にそくしていえば、諷読する際に口調が整う諧和であって、こまかな詩律の法則を意識することで工夫された音調諧和の美ではなかった。詩人の内在律にしたがって自然に口をついて出るリズムの美であるならば、詩人が性情を吟詠することの阻害にはならぬし、そこに彼は「真美」の所在をみていたといえるであろう。

鍾嶸にとって「真美を傷う」ものは音韻説ばかりではなかった。詩における典故用事の濫用も「真美を傷う」ものであった。

夫れ属辞比事は乃ち通談と為す。若し乃ち経国の文符は応に博古に資るべく、撰徳の駿奏は宜しく往烈を窮むべし。性情を吟詠するに至っては、亦た何んぞ用事を尚ばんや。「思君如流水」は即ち是れ即目、「高台多悲風」も惟だ見る所。「清晨登隴首」は恙故実無く、「明月照積雪」は詎ぞ経史を出でんや。古今の勝語を観るに、多くは補假に非ず、皆直尋に由る。顔延、謝荘は尤も繁密を為し、時に之に化す。故に大明、泰始中は文章殆ど書鈔に同じ。近くは任昉・王元長等、詞は奇を貴ばず、競うて新事を須ゆ。爾来作者は寖く以て俗を成し、遂に乃ち字句に虚語無く、語に虚字無し。補衲に拘攣して、文を窒むこと已に甚だし。但だ自然の英旨、其の人に値うこと罕なり。詞已に高きを失えば則ち宜しく事義を加うべし。天才に謝すと雖も、且つ学問を表すは亦た一理なるかな。

典故用事を繁用する詩風にむけてのきびしい弾劾である。もともと典故修辞は中国の詩の特徴を形成する一要素であった。ところが、宋代大明・泰始年間の詩は典故にとらわれて「書鈔」つまり書物の抜書きみたいになってしまっていたという。これまた永明文学の旗手、任昉、王融が独創性を軽視して、目新しい時代に典故をもとめる詩風をつくって以来、来歴のない詩句詩語の使用を鄙しみ、先人の用語のつぎはぎを得意とする悪弊を生じたと嘆く鍾嶸には経史の故実と異なるのが詩であり、古今のすぐれた詩篇の多くは「補仮に非ず、皆直尋に由る」ものだと考える認識と確信があった。

「補仮」とは他の書物から故事来歴を仮りて詩語を飾る意味で、自分の目に映じたもの、自分の心に湧きおこるものを求めて、それを直截に表現する「直尋」の概念と対立する。鍾嶸が「補仮」の方法を斥けて、「直尋」の方法を重視したのは、この「即目」「直尋」の方法によるかぎり、詩人の個性と詩篇の独創性は抹殺されずにすむとみたからである。したがって鍾嶸の所謂「性情を吟詠する」詩とは、直尋の方法によって表現された詩を意味していた。

小学に就く頃より詩作に興じ、四声八病の音節にとらわれ、典故

の繁用を喜ぶ風潮はすでに宋の詩壇に端を発し、それをひきついだ斉梁の詩壇において一層助長される傾向にあった。その傾向はおしなべて詩の真美を傷ない、内発的な独創性をさまたげるものであった。かかる形式主義的・修辞主義的詩風の堕落現象に痛烈な批判を加えざるをえないところに、鍾嶸という一人の詩論家が時代の詩と深くかかわってゆく文学的責任が存在していた。そこにまた、唯単に五言詩の優劣に品評を加えるという意図をこえて、『詩品』が制作されねばならなかった内的必然性があったといえる。

三

鍾嶸の伝記は『南史』『梁書』にみえるが、沈約・謝朓・王融が活躍した斉の永明年間には、国子生に選ばれて勉学につとめていた。とりわけ『周易』に学識を深め、時の国子祭主王倹にみとめられて、後に秀才に推挙されたほどである。『南史』王倹伝によると「永明四年、国子祭主を領す」とあり、これから推すと、鍾嶸十八歳前後のことである②。

『詩品』をみるに、謝朓の項に「朓は極(しば)しば余と詩を論じ、感激頓挫、其の文に過ぐ」という記事があり、『詩品』序に「斉に王元長なる者有り。嘗って余に謂いて云う。宮商は二儀と俱に生ず……と。」の記事がある。これは鍾嶸が謝朓・王融のいずれにも面識交友があった事実を伝えている。さらに竟陵王の文学サロンに参加し応酬の詩を制作している劉絵から、その口頭詩品を鍾嶸は直接耳にしたととれる記述がある。とすれば、かかる著名な斉の文人達との面識を一寒門出身の青年鍾嶸がどうして得ることができたのか。そこに国子生鍾嶸を見出し賞接した国子祭主王倹が介在したと考えられる。

王倹は『南史』本伝によると、江左の風流宰相謝安に自らたとえていたといわれるだけあって、風流見識に富む当時一流の人物であった。任昉の『王文憲集序』によると、王倹は「論を持すること従容、未だ嘗って人の短所を言わず。風流を張長し気類を評与す。単門後進と雖も、必ず善誘を加う」とのべて、単門後進のなかにすぐれた人材あれば、これを推挙したとある。恐らくは鍾嶸もその単門後進の一人であったに違いない。任昉はいうまでもなく「竟陵の八友」のなかでも沈約と並称される文人である。「王文憲集の序」を書いているだけに、任昉は王倹をよく知っていたと思われる。この任昉の他にも、竟陵王の下で任昉・謝朓とともに「士林」と号せられた何憲が王倹の文学サロンで文章を競い合ったという記事が『南史』徐摛伝にあるところから、竟陵王の文学サロンに出入していた当時の著名な文人が、王倹の文学サロンにも顔を出していた事実がおさえられる③。このような斉末文壇の情況から推して、鍾嶸が王倹の推挙を経て、竟陵王麾下の文人たちと王倹の文学サロンにおいて面識と交友を得る機会をもったと推測される。こうした文人交流のなかで、鍾嶸は竟陵の八友の領袖的存在であった沈約に推挙を求める挙に出て、拒否される運命を自から荷うことになったのであろう。『南史』鍾嶸伝に「嶸嘗って誉を沈約に求む。約は之を拒む」とあるのがそれである。

このことがあって以来、鍾嶸は斉の建武期の初めに南康王の侍郎、永元期に司徒行参軍、梁朝になって会稽郡大守王元簡の寧朔記室に移り、その後西中郎晋安王の記室となり、その官に卒するまで地方官の生活がつづくことになる。『南史』の本伝は「沈約の卒す

るに及び、嶸は詩を品し評を為し、其の優劣を言いて……と云う。蓋し宿憾を追いて此を以て約に報ず」と記しており、鍾嶸の沈約宿怨説はすでに唐初においてなされている。実はこの点線省略の部分は『詩品』の「梁左光禄沈約」詩評を引いており、次にそれをあげることにする。

休文の衆製を観るに五言最も優る。其の文体を詳かにし、其の余論を察するに、固より鮑明遠を憲章するを知る。経綸に閑わず、清遠に長ずる所以なり。永明の相王は文を愛し、皆之に宗附す。時において謝朓未だ遒ならず、江淹才尽き、范雲名級故より微なり。故に約は独歩と称せらる。文の至らざると雖も、其の工麗は亦た一時の選なり。閭里に重んぜられ、誦詠音を成す。嶸謂うに約の著す所既に多し、今淫雑を剪除し、其の精要を収め、允に中品の第と為す、故に当に詞は范より密に、意は江より深かるべし。

この詩評文をよくよく注意してみると、褒めているようにみえて、結局貶しめていることに帰結する文脈である。宿怨説のでてくる所以はこの文脈にある。それというのも、沈約が憲章した「宋参軍鮑照」の詩評と照応してみると、「巧似を貴び、危仄を避けず、頗る清雅の調べを傷う有り。俗を言う者の多くは鮑照に附す」とあり、「俗」の意味は甚しく俗気のあることで、鮑照の詩に俗臭をみる否定的評語である。鍾嶸が沈約の詩を「閭里に重んぜられ、誦詠を成す」というのは、そこに世俗の趣好に投じる俗臭を発見しての否定的評価であった。

「魏文帝」詩評に「新奇なる百許篇、而して皆鄙直なること偶語の如し」というのは、やはり目新しさをねらった百余篇の詩はいずれも話ことばのようにわかりやすく鄙俗であるという意味で、鄙直の語には否定的評価がふくまれている。「閭里に重んぜられ、誦詠音を成す」といった種類の俗受けのする詩が鍾嶸は徹底して嫌いであった。それは、「欣泰・子真並びに古を希い文に勝れ、俗製を鄙薄し、賞心流亮、雅音を失わず」（斉雍州刺史張欣泰・梁中書郎范縝詩評）と論じて、俗製を鄙しみ雅音を失わなかった張欣泰・范縝の詩を賞揚しているのでもわかるであろう。ここに云う俗製とは具体的には鮑照、沈約の系譜につらなる詩篇を指すものとみてよい。

沈約が憲章した鮑照を鍾嶸はどうみていたか、さらに『詩品』の序に照らして考えてみよう。

陳思は建安の傑為り、公幹・仲宣は輔為り。陸機は太康の英為り、安仁・景陽は輔為り。謝客は元嘉の雄為り、顔延年は輔為り。

魏の建安、西晋の太康両期の詩の英傑として、曹植、陸機をあげて、そのそれぞれに、英傑につぐ「輔」の詩人として劉楨と王粲、潘岳と張協の二人づつを配置しているが、宋の元嘉期になると、謝霊運に対して、「輔」たる詩人は顔延年一人をあげるにとどまっている。ところが、梁の蕭子顕の『南斉書』文学伝論では、宋朝の詩を論じて、謝霊運と鮑照を対挙している④。このように当時にあって鮑照は顔延之に匹敵する詩人とみなされていたにもかかわらず、鍾嶸は「輔」の位置から鮑照を意識的に斥けている。そこに独特の文学史観がのぞいている。

檀謝七君は並びに顔延を祖襲し、欣欣として倦まず、士大夫の雅致を得たり。余が従祖正員は常て「大明・泰始中、鮑・休の美殊に已て俗を動かす」と云う。唯此の諸人は顔・陸の体を伝え

用って固執して移らず。顔諸豎は最も家声を荷う。（斉黄門謝超宗、斉渉陽太守丘霊鞠、斉給事中郎劉祥、斉司徒長史檀超、斉正員郎鍾憲、斉諸賢令顔測、斉秀才顧則心詩評）

これからしても、鍾嶸は宋斉詩壇を二分するほどの強い影響力をもつ宋朝の詩人として鮑照と顔延之をすえて、この二派が截然と対立していたと考えていたことがわかる。然も鍾嶸の批評的立場は顔延之の詩的系譜に強い共感を寄せ、それを擁護するのに対して、鮑照から出た詩的系譜を「殊に已て俗を動かす」とみなして、まことに旗幟鮮明である。

繰返し云うならば、「俗を動かし」「閭里に重んぜられる」俗製は鮑照から沈約につながる詩的系譜の性格であり、それと拮抗するものに「士大夫の雅致」を得た顔延之の詩的系譜を発見するのが、宋から斉梁に及ぶ鍾嶸の詩史観であった。それを更に裏付ける資料がある。「斉恵休上人」詩評である。

恵休は淫靡なり。情は才に過ぐ。世は遂に之を鮑照に匹えるも、恐らくは商周ならんか。

淫靡という評語はここでしかつかわれていないが、「淫」の評語は「令暉の歌往々断絶し、擬古に尤も勝る。唯百願のみは淫なり」（宋・鮑令暉詩評）とみえ、ほぼ淫靡の意味に近い使い方がなされている。淫靡が俚俗よりはなはだしくひどく通俗的な意味をもつ評語として用いられていることは、恵休上人の詩が鮑照のそれに匹敵するとみるむきもあるが、鮑照にくらべると見劣りがするという鍾嶸の評価によってあきらかである。『南史』顔延之伝をみると、「延之毎に湯恵休の詩をうとんじて人に謂いて曰く。恵休の制作は委巷中の歌謡のみ。方に当に後事を誤まるべし」という顔延之の湯恵休に対する貶辞を伝えている。鍾嶸がこの顔延之の貶辞を踏えて、恵休上人の通俗性の強い歌謡を「淫靡」とみたて、顔延之の詩的系譜に属する詩人たちが蔑視した鮑照の典型的なエピゴーネンとして恵休上人の詩をとりあげたのであろう。

世俗の趣好にあった歌謡風の詩篇に、鍾嶸は「鄙直」「俚俗」「淫靡」の評語を与えているが、顔延之の詩的系譜に属する詩人には「士大夫の雅致」を得たと評し、さらにまた鮑照の詩が「清雅の調を失って」いるとみなしているところから、「俗」の対立概念に「雅」をみたてていたことはあきらかである。

『詩品』のなかで「雅」の評語は雅致、清雅の他に、雅怨・風雅・雅意・文雅・淵雅・雅宗といったふうに各々の雅の概念ごとに多少のバリエイションをもたせながら、いずれも褒辞として使用されている。次にあげる諸例がそれである。

其の詩は国風に出ず。骨気奇高、詞采華茂。情は雅怨を兼ね、体は文質を被む。（魏陳思王植詩評）

其の詩は小雅に出ず。雕蟲の功無けれども、而も詠懐の作は以て性霊を陶べ、幽思を発すべし。言は耳目の内にあるも、情は八荒の表に寄す。洋々乎として風雅に会し、人をして其の鄙近を忘れ、自ら遠大を致さしむ。（晉歩兵阮籍詩評）

魏文を祖襲す。善く古語を為し、指事殷勤、雅意深く篤し。詩人の激刺の旨を得たり。（魏侍中応璩詩評）

其の源は陸機に出ず。……是れ経論文雅の才なり。雅才減ずれば、若ごときの人は則ち困躓に苦しまん。（宋光禄大夫顔延之詩評）

彦昇少年のとき詩を為ること工ならず。故に世は沈詩任筆と称す。昉は深く之を恨む。晩節愛好既に篤く、又亦た遒変す。事

理を詮る若くなれども、体を拓くこと淵雅、国士の風有り。故に擢んじて中品に居く。（梁太常任昉詩評）

希逸の詩は気候清雅なれども、王・袁に逮ばず。然れども興属閑長良に鄙促無し。（宋光禄鮑荘詩評）

欣泰・子真は並びに古を希い文に勝る。俗製を鄙薄すれども、賞心流亮、雅宗を失わず。（斉雍州刺史張欣泰・梁中書郎范縝詩評）

右の挙例を一見してわかることはなんらかのかたちで詩経風雅の精神に関係のある詩人ばかりである。曹植の詩風は詩経の国風に源流している。その証拠に「乱世の音は怨みて以て怒る。其の政の乖ればなり」（毛詩大序）という詩経の怨の感情と、「小雅は怨誹して乱れず」（史記屈原伝）の小雅の精神を兼ねもつ「雅怨」の詩人であると規定している。

阮籍の詩風は小雅に源出し、洋々として詩経の風と雅の詩精神にかなっていて、題材の鄙近さを忘れて読者を自然に遠大な真実のかなたにひき寄せてゆく詩人とみている。

顔延之の詩風は陸機に源流するが、陸機の淵源は曹植にあり、曹植は詩経の国風に出ずるとみられているのだから、これも詩経の詩精神につながっている。その故か「経綸文雅の才あり」といい、国家を経営する才能とすぐれた文学的才能を所有する詩人とみている。

応璩の詩風は魏の文章に出ずとあり、詩経に源流しないが、「指事殷勤、雅意深く篤く、詩人の激刺の旨を得たり」と評するのは、彼が詩経の諷諭の精神を体得した詩人であるとみていたからである。

任昉の場合は直接的に詩経と関連する評語を見出しがたいが、「体を拓くこと雅淵、国士の風有り」といって、その詩風には深く高雅な内容を体して国士の風格があるとみており、沈約にはない経綸の才を認めている。

謝荘詩評にも詩経との関係を見出せる評語こそないが、「興属閑長にして鄙促無し」というのは、詩経の詩篇が比興を用いて直接相手の非をなじらず、婉曲に諷刺する詠法に類似しており、そのために清雅の評語がくわえられたとみられる。張欣泰・范縝の詩風は古を慕い質直で、通俗的歌曲をいやしんだばかりでなく、事物を観照する心に曇りなく、文雅の正宗たる位置を失わないとみているのだから、これまた詩経の詩精神の正統な継承者としての評価をうけていたことになる。

任昉詩評のなかで、世間から「沈詩任筆」といわれたことを深く恨み、晩年は発憤していたく詩を愛好し、その詩風を一変させたというエピソードは、沈約に宿怨を抱いていた鍾嶸の心をゆさぶるものがあり、かかる人物論を詩評のなかにはさんだものと想察される。さらにまた、范縝の場合も儒教徒の立場から『神滅論』を著し、当時国権と結托して腐敗の途をたどっていた仏教を排撃する挙に出て、結局は沈約等の誹謗を蒙むり、官界から追放された人物である。そのためか、范縝の詩が当時にあってもそれほどの評価を受けていないにもかかわらず、権力に挑戦する曇りない見識と頑質に鍾嶸は深い共感を抱いたものとみえる。

このように、詩経の詩精神を認めうる詩人はなんらかの意味で「雅」の評語を与えられている。それにひきかえ、「清雅の調を傷う」鮑照から「経綸に閑わざる」沈約に至るまでの詩的系譜には詩経の風雅比興の精神、諷諭激刺の詩風を発見できないとみるのが、

鍾嶸の詩史観である。鮑照、沈約が得意とした委巷閭里にもてはやされる通俗歌曲が極端にながれると「淫靡」になり、もはやそこでは「士大夫の雅致」は喪失されてしまったとみる危機意識が鍾嶸にあり、その危機感が一貫して『詩品』の批評に顕在化しているといえるであろう。

四

詩経の諷諭の詩精神を「雅」として尊び、近代の「淫靡」なる詩風を「俗」として斥ける鍾嶸は、魏の何晏、晋の左思の詩のなかにも、諷諭、諷規の表現をみてとり、高い評価をあたえている。

平叔の鴻雁の篇は風規見る。（魏尚書何晏詩評）　其の源は公幹より出ず。文典にして以て怨み、頗る精切を為す。諷諭の致を得たり。陸機より野なると雖も、潘岳より深し。（晉記室左思詩評）

左思の詩篇には典正な教養のなかに怨念の感情がこもり、そこに切実なリアリティがあって、詩経の諷諭の精神を獲得しているとみる鍾嶸は「典」の風格と「怨」の情念が一つになって詩経の諷諭の趣を形成していると考えている。「怨」の概念を過度な感傷の意味にとるむきもあるが、鍾嶸の「怨」は「乱世の音は怨みて以て怒る。政の乖ればなり」（毛詩大序）とおなじ概念操作であり、旺盛な現実批判の情念と解釈したい。すくなくとも左思詩評の示す方向はそうである。「其の源は国風に出ず。骨気奇高、詞彩華茂、情は雅怨を兼ね、体は文質を被むる」（魏陳思王植詩評）の場合の雅怨の語は詩経の変風変雅にみられる怨誹の情念と詩経の正風正雅にみられる典雅な感情を兼有するという意味で、曹植の詩に現実批判の精神の顕現を認める発言であった。

鍾嶸が「怨」の評語を使用する対象はおおむね不遇不平の境涯に身をおいて辛酸をなめた詩人である。

其の源は楚辞に出ず。文に情多きは、怨者の流れなり。陵は名家の子にして殊才有り。命諧わず声頽れ身喪ぶ。陵をして不遇辛苦に遭わざらしめば、其の文亦た何ぞ能く此に至らんや。（漢都尉李陵詩評）

李陵の詩が屈原の「楚辞」に源流するという鍾嶸の詩説は「怨」の情念の所在と実態を典型的におさえている。嘗て司馬遷は古人のすぐれた著書は作者が不遇不平の境涯に身をおいて発憤して制作されたとみる所謂発憤著書の説をたてている。そのなかで、楚辞については「屈原は放逐せられて離騒を著す」とのべている。この発憤著書の説は後世韓愈・欧陽修の文論にひきつがれてゆくが、鍾嶸の「怨」の詩説もこの中国文学の伝統的な文学観にもとづくものであった⑤。屈原の楚辞にはじまり、李陵につながる「怨」の情念は魏の王粲に現れ、西晋の劉琨、盧諶にひきつがれて顕在化すると鍾嶸はみる。

其の源は李陵に出ず。愴愾の詞を発し、文は秀れ質に贏し。（魏侍中王粲詩評）

其の源は王粲に出ず。善く悽戻の詞を為し、自ら清抜の気有り。現素より良才を体し、又厄運に罹る。故に善く喪乱を叙し、感恨の詞多し。中郎之を仰ぐも微逮ばざる者なり。（晉太尉劉琨・中郎盧諶詩評）

王粲・劉琨の詩篇はいずれも自ら戦乱に処し、世相を活写している。そこから「愴愾の詞」が発せられ、「悽戻の詞」がつくられたのである。「感恨の辞多し」というのも、怨の情念の切実な表現であ

る。王粲、劉琨の詩は乱世に身を処した詩人が直面した政治のひずみ、社会の矛盾を鋭くかぎわけ、それを怨誹した喪乱詩であり、それ自体が現実批判となっていた。

然しながら怨の情念が詩人の不遇不平の境涯から発するものとすれば、社会や政治の局面にまで達しないで、個別的な人間関係の破綻、離別という閉された私的局面だけでふきだしている怨詩があっても当然である。鍾嶸が『詩品』でとりあげた怨恨の詩人の系譜のなかに孤閨を怨悲する女性詩人が含まれてあるのもそのためであった。

夫妻の事既より傷むべし。文は亦た悽怨。（漢上計秦嘉・徐淑詩評）

秦機「塞女」の製、孤怨宜しく怨むべし。（晉処士郭泰機詩評）

いずれも中品に位置づけられて、悽怨、孤怨の情念がにじみでた詩篇として高く評価されている。

鍾嶸の『詩品』序をみてみると作詩の動機論を説くにあたって詩が発生する情況を叙述したところがある。

乃ち春風春鳥、秋月秋蟬、夏雲暑雨、冬月祁寒の若きは、斯れ四候の諸を詩に感ぜしむる者なり。嘉会には詩を寄せて以て親しみ、離群には詩に託して以て怨む。

自然と文学の相関係を論じたものにはすでに陸機の「文賦」が先行する。それについて鍾嶸はごく簡潔におさえるにすぎない。つづいて人事と文学の関係の叙述に移り、まず、めったに会えない者が寄り合った時の喜びも詩の制作につながり、親しい者との離別の時の怨みも詩の発生をうながすと説いてゆく鍾嶸は、怨みの詩を喜びの詩よりも重視するかのごとく、怨詩の動機論を具体的な情況のなかで凝視して、次のように云う。

羈臣境を去り、漢妾宮を辞す。或は骨朔野に横たわり、或は魂飛蓬を逐う。或は戈を外戍に負い、殺気は辺に雄んなり。寒夜衣単にして孀閨涙尽く。或は士にして佩を解きて朝より出、一たび去って反るを忘るる有り。女に蛾を揚げて寵に入り、再び盼して国を傾くる有るに至りては、凡そ斯の種々心霊を感蕩す。詩を陳るに非ざれば、何を以てか其の情を馳せん。

ここで最初の屈原と最後の李夫人の故事を除いて、具体的に歴史上の人物故事と結びつくものはみられない。唯「骨朔野に横たわり、或は魂飛蓬を逐う。或は士にして佩を解きて朝より出で、一たび去って反るを忘る」は、李陵・曹植・王粲・左思・劉琨の怨詩に照応し、「寒夜衣単にして孀閨涙尽く」は、古詩及び班婕妤、郭泰機の怨詩と相応じている。

これからしても、鍾嶸が怨恨の情念を詩のモチーフとしていかに重視していたか、知るべきであろう。

鍾嶸みずから宿怨をかかえた人である。寒門出身の才子が沈約に推挙を求めて拒否されてからは、あまりうだつのあがらぬ地方官として不遇の境涯をおくらねばならなかったのである。鍾嶸が作詩の動機に怨情を重視する内因がここにあったことも見逃せないが、怨情の問題はその時代の普遍的な文学観念として把握されねばならないように思う。例えば、斉の江淹が著した「恨賦」であるが、これは、怨恨の情念がふき出してくるさまざまな人間の情況と様態を並列的に叙述していった賦である。このように、当時斉梁時代の文学思想のなかには、怨恨の情念が人間の悲劇を象徴する典型的な情念だと意識され、その情念を素材として芸術的に昇華したものを、悲劇の美として好んで受容する怨恨の美学が存在していたと考えられ

る。

六朝の詩情が私的な怨情の局面に傾いていったのに対して、鍾嶸は「怨」の情念が個人的な悲劇の相からも発生することを認めながらも、詩経の現実批判につながるはげしい情念のはたらきを怨情の観念として把握している。したがって、鍾嶸は李陵・曹植・王粲・左思・劉琨の詩篇を規範としながら、私情に閉されていたずらに淫靡にながれてゆく斉梁文学の実態批判として、この「怨」の評語を積極的に機能させていったとみるべきであろう。

五

「雅」「怨」とならんで、鍾嶸が褒辞として繁用する評語に「清」と「奇」がある。

安道の詩は嫩弱と雖も、清上の句あり。（晉徵士戴逵詩評）

庾・白の二胡、亦た清句有り。（斉道猷上人・斉釈宝月詩評）

ここに鍾嶸が「清」の評語をあたえた二例はいずれもすっきりした句をほめたたえたものである。ただし戴逵の場合、詩風の弱さと関係して「清上」の語がつかわれていることに注意したい。これ以外に他の詩評で、「清」の評語が出てくる場合は「清遠」「清浅」「清便」「清雅」「清巧」の用語例が示すように、二字の熟語で使用されている。鍾嶸が遠・浅・便・怨・巧の結合語一字だけでは、評語として未だ熟しきれないと感じた際に、「清」の評語を付加して、評語の安定をはかったのであろう。

頗る魏文に似て、過ぎて峻切を為す。訐直にして才を露し、淵雅の致を傷う。然るに託諭清遠にして、良に鑒裁有り。亦た未だ高流たるを失わず。（晉中散大夫嵇康詩評）

其の源は王粲に出ず。善みに悽戻の詞を為り、清抜の気有り。（晉太尉劉琨詩評）

其の才力苦だ弱く、故にその清浅を務め、殊に風流媚趣を得たり。（宋僕射謝混等詩評）

范詩は清便宛転、流風廻雪の如し。（梁衛将軍范雲詩評）

希逸の詩は気候清雅。（宋光禄謝荘詩評）

令暉の歌詩は往々にして嶄絶清巧なり（斉随令暉詩評）

祐の詩は猗猗たる清調あり。（斉僕射江祐詩評）

右の用例では、「清遠」とは修辞表現がすっきりして卑俗でないという意味、「清抜之気」とは気力においてすがすがしく卓越しているという意味、「清浅」の語は下の句の「殊に風流を得たり」につながる評語であるから、きよらかでさっぱりした詩の風味を指し、「清便宛転」の語は下の句の「流風廻雪の若し」という譬からして、すがすがしく軽やかに舞いながれる風韻を指し、「気候清雅」とは詩の気韻にすがすがしい典正さがあるという意味、「清巧」の語はすっきりした巧さを意味し、「清調」はすがすがしい詩のリズムを指し、いずれも褒誉の評語としてつかわれている。この他、例えば「元長・士章は並びに盛才有り。詞美英浄」（斉寧朔将軍王融・斉中庶子劉繪詩評）、「王巾二卞並びに奇を愛して嶄絶、袁彦伯の風を慕う、宏綽ならずと雖も、文体勁浄にして華美を去ること遠し」（斉記室王巾・斉綏遠太守卞彬・斉端溪令卞鏡詩評）等の如く、鍾嶸は「清」と同じ意味で「浄」の辞をつかって批評しているが、いずれも褒辞である。

「奇」の評語は詩に個性的な独創性があることを鍾嶸が賛美するさいに、専ら用いられている。これについては、興膳宏氏が「文心

雕龍と詩品の文学観の対立」と題する論文のなかで、「奇」の字を導きの糸にして、劉勰と鍾嶸の生き方と文学観を比較しているが、劉勰が正統的解釈の立場にたって「奇」の字にプラスとマイナスの評価の使い分けをしているのに対して、鍾嶸は独創性にすぐれた作品にむけての褒辞として使ったことを詳論しているので⑥、今はその用例を列挙することにとどめる。

骨気奇高、詞彩華茂。（魏陳思王植詩評）

其の源は古詩に出ず。気に仗りて奇を愛し、動に振絶し、真骨霜を凌ぎ、高風俗に跨がる。（魏文学劉楨詩評）

規矩を尚び、綺錯を貴ばず、直致の奇を傷う有り。（晋平原相陸機）

其の源は謝混に出ず。微く細密を傷うも頗る不倫に在り。一章の中自ら玉石有るも、然るに奇句往々にして警遒。（宋吏部謝朓詩評）

王巾・二卞の詩は並びに奇を愛し新絶。（斉記室王巾、斉綏遠太守卞彬・斉端溪令卞録詩評）

子陽は奇句清抜、謝朓は常に嗟頌す。（梁常侍虞羲詩評）

『詩品』の序においても、「近ごろ任昉・王元長等の詞は奇を貴ばず、競うて新事を須う。爾来作者は寖く以て俗を成し、遂に句に虚語無く、語に虚字無し。補衲に拘攣して文を窒ばむこと已に甚し」と論評し、このなかで「奇」の評語をつかっている。「奇」つまり独創性を尚ぶ詩風と対極的な、「奇」を尚ばない詩風が典故を繁用し用事に拘束される弊害をもつと、直接には任昉・王融の詩人たちがその批判の対象にされている。つづいて『詩品』の序は「自然の英旨、其の人に値うこと罕なり。詞已に高きを失えば、宜しく事義を加うべし」とのべている。この条りの詩論については高木正一氏が「ここに自然の英旨というのは、人工を加えないすぐれた精神。鍾嶸にとってそれは典故など人為的な技巧を加えることなく、真率な感情の表出によって発揚された文学精神、ないしエスプリと呼ばれるものを意味しよう。慷慨であれ、哀怨であれ、悵恨であれ、言語表現はすべてこの精神に支えられて高い調子を発揮するものであるが、それが欽乏してしまった時に、〈詞は已に高きを失う〉事態を招くは必定。それが鍾嶸が善としない斉梁文学の一般的傾向であった」（鍾氏詩品疏(八)）と論評を加えているが、これは「即目」「直尋」を尚び「自然の英旨」を愛した鍾嶸が「奇」の評語に托した文学理念の所在をあますところなく語っている⑦。

六

『詩品』において「雅」の褒辞に対立する貶語が「俗」であったように、この「奇」に対立する評語は「不奇」であり「平」である。

其の源は王粲に出ず。其の体華艶・興託奇ならず。巧みに文字を用い、務めて妍冶を為す。名は襲代に高しと雖も、而も疏亮の士猶お其の児女の情多く、風雲の気少なきを恨む。（晋司空張華詩評）

但昉既に博物。動に輒ち事を用うれば、詩は奇なるを得ざる所以なり。（梁太常任昉詩評）

元瑜・堅石七君の詩は並に平典。古体を失わず。（魏倉曹属阮瑀・晋頓丘太守欧陽建等詩評）

季友の文、余嘗って忽而として察せず、今、沈特進の選詩は其

の数首を載す。亦復た平美なり。（宋尚書令傅亮詩評）

謝の詩は平々のみ。多て自ら能くすと。嘗て徐太尉に語って云う。我が詩生気有り、人の捉え著えるを須つ、爾ずんば便ち飛びて去らんと。（斉諸祭令袁嘏詩評）

才の難きは信なるかな。康楽と羊・何の此の若きを以て而も二人の文辞は殆ど奇とするに足らず。（宋記室何長瑜・羊曜璠詩評）

「不奇」「不得奇」「不足奇」「平典」「平美」「平平」というのは、いずれも独創性にとぼしく個性的な創造を発揚できないでいる凡庸な作風を指して云う貶辞である。とりわけ傅亮の詩評は沈約の選詩眼を嘲笑したもので、ここにも沈約に対するなみなみならぬ宿怨の情があらわれている。袁嘏の詩評では、自負するほどには、とるにたらぬ詩であることを語ったものであるが、袁嘏が自分の詩の生気にことよせて、詩を認めてとりたててくれる者をまつと徐太尉に語った逸話をはさんでおり、詩評として頗る異彩を放っている。これは、当時の知識人にとって詩がいかに仕官の途につながっていたかを如実に物語っているとともに、『詩品』の詩評が対象とする詩人の人品にかかわる評価をはらむ好例として興味ぶかい資料を提供している。

鍾嶸が「平美」の評語をつかった例は、他にも「平美を去ること遠し」（斉記室王巾等詩評）とあり、ここでもつきなみの美しさ、通俗的な美しさの意味にもちいている。これも「平」「不奇」につながる貶辞の一つである。

潘岳を憲章す。文体相輝き、彪炳ぶべし。始めて永嘉の平淡の体を変ず。故に中興第一と称せられる。（晋宏農太守郭璞詩評）

永嘉とは西晋の一時期で、その時代にあらわれた平淡な詩体を変革した詩人が郭璞であると称賛しているのだから、「平淡」も「平美」とおなじく貶辞である。それでは所謂永嘉の平淡の体とはいかなる詩体を指して云うのであろうか。ここにも鍾嶸の詩史観を考える際におさえておかねばならぬ重要な問題がある。

永嘉以来、清虚は俗に在り。王武子の輩の詩は道家の言を貴ぶ。爰に江表に泊び、玄風尚お備わる。真長・仲祖・桓庾の諸公猶お相襲う。世に称して孫許いよいよ恬淡の詞を善くすると。（晋驃騎王済・晋征南将軍杜預・晋廷尉孫綽・晋徴士許詢詩評）

老荘清虚の思想が知識人の心をとらえるのはすでに魏の正始の竹林の七賢にはじまるが、知識人一般に定着する時期を、鍾嶸は西晋の懐帝の永嘉年間とみたのであろう。晋の王済・杜預が永嘉以前の詩人であることからして、この鍾嶸の永嘉以来という発言には矛盾があるとみる高松亨明氏の説があるが⑧、道家の清虚の言辞がなまのかたちで詩語に用いられるようになったのが、この王済・杜預にはじまるとすれば、それほど矛盾した発言とは思えない。然しながら、現在では殆ど散逸してしまった二人の詩風を、嵇康、阮籍の詩風とくらべて検証できない憾みはのこる。いずれにしても、東晋に至ると、道家の玄風が詩篇に盛んに現われ、劉惔・王蒙・桓温・桓玄・庾亮・庾闡の徒にひきつがれ、更に孫綽・許詢に至って恬淡の詞を善くしたと世に称せられるようになったのは事実である。「恬淡の詞」という評語は「平淡の体」を措辞の面からとらえたものである。これを『詩品』の序が詩史論を展開しているところと照応すると、「恬淡の詞」でつづられた玄言詩の「平淡の体」の実態が浮上し、一層あきらかとなる。

永嘉の時、黄老を貴び、虚談を尚ぶ。時に于いて篇什の理は其

の辞に過ぎ、淡乎として味わい寡し。爰に江表に及び、微波尚お伝わり、孫綽・許詢・桓・庾の諸公は皆平典にして道徳論に似たり。建安の風尽く。是より先に郭景純は俊上の才を用って創めて其の体を変じ、劉越石は清剛の気に仗って厥の美を賛成す。然れども彼は衆、我は寡、未だ俗を動かす能わず。義熙中に逮び、謝益寿斐然として継ぎ作る。元嘉の初め、謝霊運有り、才高く辞盛んに富艶。蹤じ難し。固より已に劉郭を含跨し、潘陸を凌轢す。

鍾嶸は永嘉に端を発する玄言詩に対して、その特徴を理窟ばって味わいすくないもので、平板な表現で道徳論みたいだと論評して、甚だてきびしい。劉勰はこの玄言詩についてすでに「江左の篇製は玄風に溺る。徇務の志を嗤笑し、亡機の談を崇盛す。袁・孫以下各ぞれ雕采有りと雖も、而も辞趣一撥、与に雄を争う無し。景純の仙篇は挺抜して俊と為す」（文心雕龍・明詩篇）という論評を加えている。袁宏・孫綽の玄言詩に雕采を認める劉勰の説と、孫綽・許詢のそれを平典とする鍾嶸の説とではそこにあきらかな評価の違いがあるけれども、遊仙詩を書いた郭璞の俊才が玄言詩に変化をもたらしたとみる観点を含めて、類ねの文脈で両者の玄言詩批判は軌を一にしている。鍾嶸は黙して語らないが、沈約をとおして自分と対称的な生き方をした劉勰の『文心雕龍』を読みながらも、あえてそれに意識的に触れまいとする態度をここにも貫いている。

ここで、鍾嶸が玄言詩の出現によって、魏の建安期の詩風が尽き果ててしまったと嘆いているのは、とりわけ留意に値する。なぜなら、鍾嶸の詩史観は五言詩の最盛期を魏の曹植・劉楨・王粲が活躍した建安期においており、つねにそこに指帰して範をとるべき詩風が存在していると考えているからである。建安時代には、玄言詩と異なって味わいの豊潤な独創性に富む詩篇が数多く制作されていたとみたからこそ、玄言詩の出現によって建安期の詩風の命脈が尽きたと判断したのである。

降って建安に及び、曹公父子、篤く斯文を好む。平原兄弟、鬱として文棟為り。劉楨・王粲は其の羽翼たり。次いで龍に攀じ鳳に託し自ら属車に致す者有り。蓋し百を持て計う。彬彬の盛大いに備れり。爾の後は陵遅衰微し、有晋に訖る。太康中、三張二陸両潘一左、勃爾として復た興り、前王を踵武し、風流未だ沫まず亦た文章の中興なり。

これは、鍾嶸が『詩品』の序で自己の詩史観を述べて、建安時代における五言詩の活況ぶりを論評した箇所である。晋の太康期を詩の中興期とみたてていることからも、建安時代に詩の最盛期をみていることはあきらかである。その建安時代の詩風を確立させた代表的詩人こそ曹植であった。

其の体は国風に出ず。骨気奇高・詞彩華茂・情は雅怨を兼ね、体は文質を被むる。粲として今古に溢れ、卓爾として不群なり。嗟呼、陳思の文に於けるや人倫の周孔有り、鱗羽の龍鳳有り、音楽の琴笙有り、女工の黼黻有るに喩うべし。爾の鉛を懐き墨を吮う者をして、篇章を抱いて景慕し、余暉に暎じて以て自ら燭らさしむ。故に孔子の門、如し詩に用うれば、公幹は堂に升り、思王は室に入り、景陽、潘、陸自ら廊廡の間に坐すべし。（魏陳思王植詩評）

これは最大級の賛辞である。周公・孔子に譬うるところからみて鍾嶸にとって曹植は詩聖と映ったのであろう。その詩の気骨は高

く、独創的であり、修辞も華やかにして豊かであり、「雅」と「怨」を兼ねもつ詩情と文質彬彬たる詩風は詩史をつらぬいて粲然と輝き、群をぬいて卓越していると、鍾嶸はほめそやす。詩経国風の流を汲むとみる曹植の詩評が、『詩品』のなかで高い価値を付与されている「雅」「怨」「奇」の三つの褒辞を象眼していることに留意しただけでも、鍾嶸が曹植の詩風のなかに自己の文学理念と美意識の典型を発見していたことは確かである。

鍾嶸の『詩品』は品評という体裁をとりながら、あきらかに彼の目前にある斉梁文学の弊風である典故用事の繁雑化を指弾し、四声八病説の声律による拘束化を痛撃して、「即目」「直尋」の表現方法によって、「真美」の詩風を確立することをはかったものであった。そこに鍾嶸が沈約に対する個人的な宿憾の情をこえて、時代の文学的情況にかかわってゆく文学的責任が賭けられており、『詩品』を著さねばならぬ内的必然性が存在していたといえるであろう。

（一九七三・三・一四・脱稿）

註

① 拙稿「裴子野〈雕蟲論〉考証」―六朝に於ける復古文学論の構造―（日本中国学会報第二十集）参照

② 王津達氏の「鍾嶸生卒年代考」（一九五七・八・一六日付光明日報・文学遺産第一七〇期所収）は鍾嶸の生年を宋の泰始四年（四六八）卒年を梁の天監十七年（五一八）と考証し、王倹が吏部を領した永明四年に鍾嶸が秀才にあげられたと推測している。

③ 拙論は鍾嶸と竟陵王のサロンに集っていた文人群とを結びつけた人物に王倹が介在していたと推論したが、その推論を樹てるにあたって、森野繁夫氏の『六朝詩の研究』（学習社刊）の「斉梁の文学集団と中心人物」の条りを参考にした。

④ 蕭子顕の『南斉書』文学伝論の「今之文章、作者雖衆、抱而為論、略有三体。一則啓心閑繹、托辞華曠、雖存巧緒終致迂回、宜登公宴本凡准的、而疏慢閙緩青盲之病、曲正可採酷不入情、此体之源、出霊運而成也。（中略）次則発唱驚挺、操調険急、雕藻淫艶、傾炫心魂、赤猶五色之有紅紫、八音之有鄭衛、斯鮑照之遺烈也。

⑤ 司馬遷の発憤著書の説は「太史公自序」に依る。拙論「鍾嶸における発憤著書の説」（文学研究七一輯所収）を参照。

⑥ 興膳宏氏の「文心雕龍と詩品の文学観の対立」（吉川幸次郎博士退休記念中国文学論集所収）を参照。

⑦ 高木正一氏の説は「鍾氏詩品疏(八)」（立命館文学第三〇九号所収）からの引用である。

⑧ 高松亨明氏の『詩品詳解』（弘前大学中国文学会刊）を参照。

⑨ 拙論「鍾嶸の文学理念」の脱稿にあたって、高木正一氏が恵贈下さった「鍾氏詩品疏」、車柱環氏の「鍾嶸詩品校証」は常に座右において参考に供した。更に高松亨明氏の『詩品詳解』及び寄贈をあづかった興膳宏氏の『文学論集』（朝日新聞社刊中国文明選所収詩品）と、船津富彦氏の「梁の鍾嶸の故事論」（東洋大学文学部紀要の説に啓発を受けたことを付記しておく。尚ごく最近高木正一氏の『鍾嶸詩品』が東海大学出版部から発刊されると仄聞するが、この著書を未見のままに拙稿を終ったのはまことに残念である。